

いじょうぶなのではないかと思えます。彼女はわたくしがこの星の人間ではないことも知っておりますし」

ぼくを安心させるようにそう答えてから、師匠さんはぼくの家の電話に手をあてた。ついさっき、ぼくがそこからかけた電話で、ライネのところまで飛んでいった電波の足跡をたどるのだと言っていた。そうすることで、ライネの居場所を突き止められるかもしれないらしい。

姉ちゃんは居間のドアに身を隠すようにして、ぼくと師匠さんのことをじろろ見ていた。突然現われた桐神鳴のそっくりさんが何者なのか知りたがっているのはわかっていたけど、上手に説明できる自信がまったくなかったので、ぼくは気づかないふりをしていた。

師匠さんは深刻な顔でライネの居場所を探っていた。それを見たぼくは申し訳なくなつて、師匠さんに謝つた。

「……ごめんなさい。ぼくがだまされたせいでライネがさらわれちゃつて」

「そんな、ノドカさまのせいではございません。これはむしろわたくしの責任です。わたくしが黙つて教育係をやめたりしたばかりに、ライネさまをこのような危険な目にあわせてしまつて……」

悔やんでも悔やみきれないという声だった。師匠さんは、今でもライネのことを大切に思っている。改めてそのことがわかつた。だけどそれなら、どうしてなにも言わずに、

ライネの前からいなくなつたりしたんですか？

ぼくが尋ねようとしていたそのとき、師匠さんが電話から手を離してぼくのほうを向いた。

「ライネさまの居場所がわかりました。ここから百キロほど離れた場所にとらわれているようです」

「えっ、ほんとですか！」

「はい。おそらく犯人は、ノドカさまがわたくしに助けを求めることも、このように居場所を特定されることも予想していません。すぐに向かえばライネさまを救出できます」

師匠さんは決意の表情で、今にも玄関から飛びだしていきそうだ。ぼくは慌てて師匠さんを止めた。

「あの、まさかひとりで助けにいらつたりしないですよ。ライネの星の警察とかそういうのに連絡したほうが……」

「いえ、こちらに飛んでくる途中です。まだ時間が必要らしいのですが、救援が地球に着くまでには、まだ時間が必要らしいのです。ライネさまが今も危険にさらされているかと思うと、とても救援を待っているわけにはまいりません」

ですからここはわたくしひとりで、と師匠さんはきつぱり答えた。それから師匠さんはぼくに深々と頭を下げて、「ノドカさま、ライネさまのことを知らせてくださつて、本当にありがとうございます。このご恩はあとで必ずお返しいたします。それでは、わたくしはこれにて」